芦田慶治先生を追想す

大塚節治

芦田先生は昭和十一年八月十八日に下鴨の居に於て長逝せられ、其の葬儀は同九月二十日同志社公會堂に於て行はれた。今から丁度一年の昔である。今こゝに我儕同人が先生の追悼號を出すに當り聊か先生について所感を述べて以て卷頭の辭に代へることとする。

私は明治四十三年から同四十五年まで丁度二ヶ年間學生として先生の教導を受け、大正五年より昨年に至るまで、丁度二十ヶ年の長きに亙り先生の御世話になり先生を長老教授として頂き、神學研究の爲めに勞を共にしたものである。從つて私個人としては、先生に對して或は感謝もし、懺悔もし度いことが數々あるが、茲には出來る丈け私事を省いて先生が教育行政者として、神學者として、教育者として如何なる苦心をされ又如何なる方であられたかに就き私の感ずる處を述べて追想の辭に代へ度いと思ふ。

先生は初め、平教授として同志社に赴任されたのであるが、學校の事情は先生をして教育行政に關與せねばならぬ樣にせしめたのである。

抑も先生は同志社に奉職せられてより、神學教授たること二十一ヶ年、引退後講師たること四ヶ年半、合はせ二

十五ヶ年の長きに亙つて基督教神學建設と神學教育、傳道者養成の爲めに心血を注がれたのである。其間に神學部教頭代理として一ヶ年餘、教頭事務取扱として數ヶ月、學制が改つてからは神學部長として二ヶ年、更に大學昇格後には文學部長並神學科主任として五ヶ年、その間に專門學校神學部創設のため貢獻してその部長を兼任する事三ヶ年、文學部長を後進に讓つて後も大學神學科主任兼專門學校神學部長として神學教育の責任に止まる事三ヶ年、その間の先生の苦心と努力とは想像に餘りあるものがある。

顧みるに大正七年同志社異變の際、神學部はその教頭と二人の少壯教授を失ひ、日本人教師としては先生と、一人の若き教師が殘つたのみであつた。この俄かに瘠せ衰へたる我が神學部を背負つて外に對して同志社神學部の從來の信望を失墜することなく、內に於ては他の學部に對する地位を保つ爲めに、先生は非常に苦心されたのである。當時、海老名總長就任匆々、吉野作造博士門下の逸足が多く法學部に迎へられ學內の勢力は自ら平均を失し神學部の形勢は一層不利になつた。從つて學內の行政に關しての先生の苦心は容易なものではなかつた。豐かならざる財政と學部充實の必要との間に立ち、又、財團當局と教授會との間に立ち、先生の拂はれた苦勞は想像に餘りあつたと考へる。神學部が、英文科の後身たる文學部と合併して文學部の一科となつてから後は文學部長として多種多樣なる系統の教授を統率するには可なりの骨が折れたことと察せられる。文學部が今日多少なりとも整頓して居るとせば、そは先生の努力に負ふ處が少くないと考へる。又今日神學科が多少なりとも形態を整へ內容を充實し得たりとすれば、其遠因は先生前の神學部教授や宣教師の方々の奉仕にあることは勿論であるが、先生の拂はれた努力に負ふ處も亦決して少くないと曰はねばならぬ。從つて今日組合教會や、同胞教會の諸教會に

於て活躍せる人材も亦先生に負ふ處少なからずと曰はねばならない。

斯様に芦田先生は、神學行政神學教育のために肝膽を碎かれたのであるが、更に學園基金の獲得についても常に留意し當局を鞭韃して力を盡されたことは今尚ほ記憶に新たな處である。殊に米國の富豪にして神學教育に同情ある某氏が來朝せられた時の如きは先生は特意の英文と英語を以て奔走、活躍されたのである。惜しむらくは先生の健康は學事行政者として長く文學部長や神學部長の椅子に止まることを許さず從つてその方面に赫々たる功績を殘されなかつたのであるが、しかも、大學昇格當時學制の編成及び、專門學校神學部新設等に於ける先生の功績は長く同志社關係者の忘れてはならぬ處と考へる。加之、我等後進の海外留學、待遇の改善、研究設備の整頓、等極めて地味なる事柄ではあつたが、先生に負ふ處多く、實質的には今日の成果を作り出したるもので、我等の長く感謝し記憶せねばならぬ處と考へる。

更に先生が心血を注がれたのは基督教神學建設のためであつた。先生は初め新約聖書を研究され其結果としてロマ書講義を著はされたのであるが、先生の新約學者としての價値はこの書に依つて認められたのである。同志社の招聘を受くるに至られたのも恐くは本書による認識からと考へられるのである。この書は實際我國に於ける新約學に於ては忘る可らざる文獻の一つになつて居る。私は遲蒔乍ら昨年先生を追想するために始めてこの書を繙いたのであるがその文章の流麗、雄健なるは勿論その研究と洞察の深く且つ精微なることに驚かされたのである。明治四十年にこの書を物された先生が明治四十三、四年の頃私共の新約註釋の講義に於て、何故これを教科書として用ひられなかつたのであらうか、私は不思議でならない。惟ふに先生自ら飽き足らずと考へられたので

あらう。それにしても、自家製のプリトン教科書が洪水の如く行はれて居る今日から見て一種の感に打たるゝものあがる。

先生は斯く初めは新約學者として立たれそれ故に同志社に迎へられたのであるが、元來先生は唯の歴史家ではなく、寧ろ批評家、評論家であつた。そこで先生は常に時代思想に注意を拂ひ、時代の人心を滿足せしめるに足る神學を建てんと志ざされたのである。偶々、學内の事情は先生自ら組織神學の擔當を餘儀なくせしめるに至つたのである。基督教思想信仰を代表する一山の總率として自ら滿足するに足る神學の建設の要求に迫られ、外流轉極りなき時代思想に應接して、基督教の立場を然りか、否かの形に於て示す可き事を要求さるゝ立場にあられた先生の苦心は尋常ではなかつたのである。併し先生は象牙の塔に立て籠ることなく、よく新聞に雜誌に論戰することを躊躇されなかつた。古くは、加藤弘之博士の「キリスト教に於ける肉食と愛なる神の矛盾」に對する反駁、近年に於ては、大毎紙上に於ける某博士の「宗教批判」に對する論駁の如きはそれを示すものである。特に後者の如きは、その輕快辛刺なる筆を以て基督教のために萬丈の氣焔を吐かれたものであることは、我等の記憶に尚ほ新らたなる處である。これは誠に先生得意の壇上であつて他人のよく追從し得ざる處であつた。かゝる文筆の材少き今日、先生なきは獨り我が同志社に寂寥を感ぜしめるのみならず、又我が基督教界にも一種の淋しさを感ぜしめる。

組織家としての先生の苦心は大正十四年の「基督教本質確立の問題」や昭和四年、五年に於ける「歴史的啓示の問題」と云ふ諸論文に於て窺はれる。前者に於ては大體トレルチの考を採つて居られるが、後者に於ては却つて

往年先生が親まれたオイツケンのスンタグマの思想に於て信仰のキリストの絶對性と歴史のイエスの相對性とを調和せんとして居られる。

兎も角もこれ等の問題は一方にはキリスト教神學思想に關する歴史的知識と訓練とを前提とし、他方には哲學的洞察力と組織的頭腦を要し、更に加之信仰上の深き體驗を伴はねば問題を取扱ふ資格なき困難にして複雑なものであつて、泰西の碩學も容易に滿足なる解答を示し得ない處である。以て先生の苦心の程も察せられるのであるが、大體先生は我々一般の神學々徒と同樣に昭和五六年の頃までは從來の理想主義的自由主義の立場に立つて居られたのである。

然るにこの頃から漸く、バルト神學の影響が我國に於ても著しくなり先生も亦漸次その眞價を認めらるゝに至り茲に一大轉向、少くとも一大修正を行ふの必要に迫られたのである。從來の神學に對するバルト神學の影響はニウトンの萬有引力說に立脚せる物理學、天文學に對するアインシュタインの相對性原理のそれにも比すべき大なるものであつて、我等神學研究者に取つては一大衝擊であつた。

抑も一學究が過去の學說と立場を棄てゝ新たなる方向に進むことは、恰も資本家が其投資を全く棄てゝ新たなる企業をなすが如く、或は開拓者が住み慣れし故鄕を棄てゝ單身孤劍、空手を以て異鄕に旅立つにも等しく、過去の立場と蓄積とに對して捨て難き愛惜を感ずるものである。しかも六十五歲にも達し、體力精神力の共に消耗せる齡に當つては學說上の立場を移すことは一層困難であらねばならぬ。かゝる場合先生は我等の壯者に先んじて新方向へと向ふことを躊躇せられなかつたのは誠に感嘆の外はない。同志社六十周年記念誌、「我等の同志社」

に於て次の詞を見るのである。

「芦田先生は老境の今日バルト神學に多大の興味を覺えられそのロマ書講義に於ては毎時間感嘆の聲まで發せらるゝのである。身鶴の如く而かも劍の鋭さで一言一句吟味しつゝ語らるゝ處、學生は思はず襟を正されるのである。魂の渦きをおぼゆる者へ神學上の問題に行迷ふものに自らの信仰上又は神學上の惱み、さては苦き體驗を通じて靜かにその行く途を示して下さる邊り先生の身は白光に包まれ天に昇つて行かれるのかと思はれる」云々

教場に於けるかゝる光景は偶ま以て先生が眞劍に眞理を求め信仰に精進されたことを語るものであらう。

先生は、若干の若き人々を相手にバルトのロマ書講義の飜譯を進めて居られたのであるが、業半ばにして逝かれたことは我が神學界のため惜しみても餘りあることと云はねばならぬ。

先生の學問的功績は第一には基督教の眞理を世に向つて辨證する辯證的業績であつたと思ふ。其筆數は寧ろ僅少であつたが其效果は決して少くなかつたと思はれる。第二は神學的開拓である。固より基督教の通俗的紹介や福音宣傳の開拓は已に五十年、六十年の年數を經て居たのであるが、學問らしき學問の開拓は寧ろこゝ十數年來の事である。而して先生の晩年は丁度此時期に捧げられ、假令纏まりたる業績を殘されなかつたにしても後進誘掖奬勵に於て盡された無形の功績は我等の忘れ得ざる處である。第三に先生が神學建設の爲めに致された功績は外來語の邦譯に於てであらう。先生は思想表現のために言語を選ぶことに苦心された方である。從つて適當なる術語を作る事に得意の方であつた。そこで外來術語の飜譯に於て巧妙なる譯語が少くない。今日廣く用ひられて居るミステリ・レリジョンの譯、密儀教、レヒトフエルテグングの譯、義認の如きは其例かと思はれる。

更に私共が忘れてならぬのはヘースチングズの宗教倫理大辭典に寄稿された日本の倫理思想に關する英文の論文である。これに依つて先生の名は廣く長く世界の各所に覺えられるであらう。

次ぎに私は人間として殊に教育者としての先生について一言し度いと思ふ。先生の人となりは一言にして言へば常に心の若き方であつたと言へよう。心若きが故に頑迷固陋でなく青年の心がよく解り頭が化石せず常に進歩があり、廣く文藝や政治や經濟にも興味と關心とを寄せられたのである。先生が病弱の身を以て尙ほ七十歳の高齡を保たれたのもその健康についての細心の注意の外に心若さがあつた故と思はれる。

元來先生は健康に惠まれなかつた方であるがしかも七十歳にして長逝せらるゝ約半年前まで教壇に立たれたことは寧ろ不思議の感なきを得ない。併し先生の健康に關して拂はれた注意と節制、先生の內面生活を知る者はそれを決して不可思議とは思はない。先生はその弱躰をも神の賜物として極力これを大事にして細心の注意を拂はれたのである。これは弱躰を有つ者に對してのよき教訓と奬勵とであり、又頑健なる人々の不節制に對する警告である。併し先生の健康は唯その注意、節制のみによるのではなく、實にその心の常に若かゝりし事によると思はれる。先生の心の若さは先生の學問、性格、等凡ゆる方面を特徵づけて居ると思はれるが、その健康も亦心の若かさに依つて支えられた處が少くない。心若きが故に常に希望に滿ち、前途を眺め心中自ら活力が生じたものと思はれる。臨終の床にあつて世の人は一寸先きは暗闇と云ふが一寸先きは光であると云つて居られたが、これは勿論唯の心の若さではなく、深き信仰から惠まれた境地であるが、矢張り心の若さが信仰に依つて高められたものと言へよう。

芦田慶治先生を追想す

先生の心の若さは教育者として、青年の友として先生を特徴づけた大きな原因である。先生は青年學生の心をよく理解した青年の同情者であつた。先生は青年の教育者であり同時にその友であつた。先生は秋霜烈日、嚴正格謹なる教育者と云ふよりも寧ろ、よき助言者であり、友であり、慈父であつた。

先生の心の若さは先生の學問思想に於て又先生を特徴づけて居る。先生の心は常に若く常に成長して居る。故に決して一つの處に止まつて居らず、常に改造され、推進されたのである。これ先生が常に時代の進運に遲れず、各時代に於て青年學生を滿足せしめられた所以であらう。先生の頭は化石せず、先生のノートは常に改正された。七十歳にして尙ほ現代青年を教壇に魅惑する事の出來た先生は確かに我が同志社の寶であつた。

先生は斯樣に常に心若く殊に米國大學の教育を受けられた最も進歩主義の人であつたが、その家庭に於ける生活は日本固有の孝道に徹底せられた方であつた。其母堂が多年病床にあられた間、先生が日夕看護のために盡されたことは唯々尊敬の外はない。又先生が親戚の方々に對して捧げられた愛と奉仕とは側から見る者の感激の的であつた。

先生が立派なる後嗣者を得、安心し長逝せられたのも畢竟先生の愛の賜であらねばならぬ。先生は健康思はしからざりし爲に教會のために應援せられた事は、比較的少かつたのであるが、基督者としての信仰は年と共に進み、晩年には非常に高き境地まで進まれた樣であつた。時に先生を病床に訪れて驚いたのはその顏が如何にも神々しかつた事である。先生の顏には聖者の面影があつた。「榮光より榮光に進み主たる御靈によりて主と同じ像に化すなり」とのパウロの言を恰かも現實に見たるが如くに感じたのである。

まことに先生の一生は西の山端に沈み行く莊嚴なる夕日にも比す可き勳業赫々たるものではなかつた。それは固より先生の望まれた處ではあるまい。先生の一生は中秋の天にかゝる明月の如く靜かに澄み切つたものであつた。先生の臨終は有明の月影が黎明へと薄れ行つて全く晝の世界へと移る如く澄切つた眞如の月影は、彼岸の世界へと明け渡つて、神の榮光に攝取され給ふたのである。今や先生は、鏡を以て見る如く朧にではなく顏と顏とを合はせて、神の御前に立たるゝ事であらう。誠にこの朽つる者は朽ちぬものを着、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり、この朽つる者は朽ちぬ者をこの死ぬる者は死なぬものを着んとき「死は勝に呑まれたりと錄されたる言は成就す可し」「死よなんぢの勝は何處にかある、死よなんぢの刺は何處にかある」死の刺は罪なり、罪の力は律法なり、されど感謝すべきかな、神は我らの主、イエス、キリストによりて勝を與へ給ふ。

先生がこの永遠の勝利、朽ちざる榮冠を獲得して、天父の許に逝かれてより已に一年有餘、歲月の流るゝは實に速い。今こゝに先生を追想し一言所感を述べて卷頭の辭に代へる。

（本文は昨年九月二十日の式辭を修正したものである。改めて筆を執り得なかつたことを遺憾とする。）